



a letter

星空

カフェ

彼女はいつも毎週金曜日の10時に来る。

いつも外の景色の見える二人掛けのbox席に座る。

そして、WALKMANで音楽を聴きながら本を読んで帰る。

店員とはその日の天気の話をするだけ。

「隣に座ってもいいですか？」

僕は思い切って声をかけた。

彼女はうなずいた。

2人共黙って本を読んだ。

ベッド

日曜の朝、カサッとページをめくる音で目が覚めた。

彼女は枕に本を置いて読んでいる。

ゆうべは熱かったのに。

柔らかい素肌が見える。

僕は彼女を見つめた。

彼女は本に夢中だ。

ふと、時計を見ると、まだ6時だ。

いつから本を読んでいるのだろう。

まあ、いいや。

僕はまた、眠りについた。

ギター

新緑色のレースのカーテンが揺れてる。
僕は窓際に椅子を置いてギターに手をかけた。
彼女はにこやかな笑顔でコーヒーを手渡してくれた。
僕は一口飲んだ。
とても温かくておいしい。
愛情一杯だ。
「あ・り・が・と・う」
僕はお礼に、ギターで奏でた。
五月の風が僕らを包んだ。

図書館

僕は図書館で働いている。

またいつもの遠い町からのリクエストだ。

本を探しに行かなきゃ。

彼女はいつも僕好みの本の取り寄せリクエストをしてくる。

今度の本は僕が先週読んだ本だ。

彼女が読んでくれるのは嬉しい。

本を彼女の住む町の図書館に送る時、

こっそりきのう読み終わった本も彼女に送った。

「すみません。」

また彼女だ。

黒くてまっすぐの長い髪。そして黒縁めがね。

「あの本取ってください。」

僕の本屋で一番高いところにある本を指差した。

はしごをのぼって、彼女の指差した本を取って手渡した。

「ありがとうございます。」

でも、彼女はいつも買わないんだ。

本の香りをにおいにくるんだ。

ああ、また遅刻だ。

なかなか仕事から抜け出れなかった。

待ち合わせのカフェに慌てて走った。

やっぱり彼女は来ていた。

今日も本を読んでいる。

頼んだアイスティーにも手をつけてない。

氷がすっかり溶けて上澄みだけが透明色になってる。

声をかけるはためらった。

「お待たせ。」

「え、もう来ちゃったの？」

お酒

こんなところで本を読むなんて変な子だな。

僕は初めて彼女を見た時、そう思った。

だって、ここはカフェじゃないよ。

ここは、お酒を飲みに来るところだよ。

カウンターの端で壁に寄りかかり、本を開いている。

ちょうど小さなランタンのある特等席だ。

誰かに声をかけられるのを待っているのかな。

僕は君を見ているだけにしておこう。

ベンチ

今日もいいことがなかった。
公園のベンチに座って空を見上げた。
秋空と共に枯葉が舞っていく。
チリンと自転車のベルが鳴り、ふと目をやった。
本を読みながら歩いている彼女に出会った。
すみません、と頭を下げ、また彼女は歩き出した。
ここにきて座って読めばいいのに。
そう思ったら、僕の座ってるベンチにきてくれた。

デート

僕らはいつでもどこでもデートができる。

君が今本を読んでいるのは知っている。

離れていてもわかってる。

一緒にいてもわかってる。

僕もいつも本を読んでいる。

僕らは一緒。

他のカップルみたいにデートもするさ。

本を読むことが僕らのデート。

だから一緒にいなくてもデートできるのさ。

しおり

まだ僕と付き合う前に、
まだ僕と知り合う前に、
彼女は僕にプレゼントを用意してくれた。
めがねの形をしたしおりだ。
僕らが付き合うことになった日にすぐにくれた。
「ずっとね、プレゼントしようと思ってたの。」
僕と彼女はお揃いのめがねのしおりだ。
この先の二人の道にもしおりを挟んでいこうね。